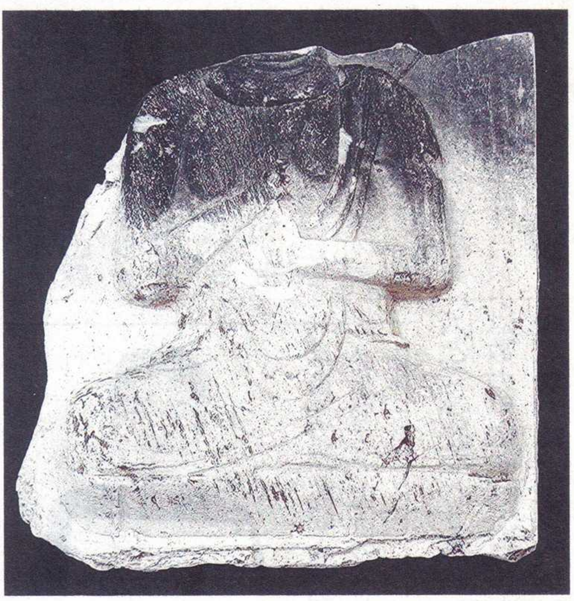
岩手県奥州市にある奥州藤原氏ゆかりの遺跡で発掘された塼仏が、平安時代末期の珠洲焼であることが、国立歴史民俗博物館名誉教授の吉岡康暢さん（金沢市）によって確認された。これまで伝世品はあるが、発掘されたのは初めて。（小松泰静）

平安末期の「珠洲焼」

奥州藤原氏館跡で発掘の塼仏



珠洲焼と確認された塼仏（岩手県奥州市のえさし郷土文化館提供）

遺跡は奥州市江刺区の豊田館跡。奥州藤原氏初代の清衡（一〇五六～一一二八年）が生まれ育った館で、清衡の代に南西約二十キロの平泉（岩手県平泉町）に本拠地を移した。

一九九二年の発掘で溝跡から塼仏と甕が見つかった。塼仏は粘土で型を取って焼成したタイル状の仏像。見つかった塼仏は頭部を欠くが、高さ一六センチ、幅一四・八センチ、厚さ三・八センチ。両手指で大日如来を表す「智拳印」を結んでいる。

同じ型で作った塼仏の伝世品は七尾市能登島のほか、兵庫県たつの市でも見つかっているため、兵庫産説もあるが、顔の造形や衣を細い隆起線の浮き彫りで表現する手法が珠洲産の仏像に類似しており、珠洲産と判定された。

ただ、珠洲焼が誕生したのは十二世紀後半、奥州藤原氏三代秀衡の時代なので、奥州藤原氏発祥の地である豊田館に、一族が祠を建てて祀ったと推測される。

当時の珠洲地方には京都の日野家が管理する荘園・若山荘が置かれた。日野家の祈禱所として法住寺（珠洲市）が栄え、僧侶が製作に関わった仏器が日本海海運を利用して東北へ運ばれたとみられる。

吉岡さんは「塼仏が珠洲産と確認されたことで、珠洲窯が渥美窯（愛知県）と並ぶ仏器の特産地だったことが分かったのは大変意義深い」と話している。

確認の吉岡さん「かつての仏器産地」